

世界遺産登録10年後の屋久島

＝会報『自然保護』No. 474(2003年7.8月号)より転載＝



▲白谷雲水峡

日本という国の自然の特徴・「島がつくった自然」を紹介してきた。

島の自然を守る制約がいろいろあるなか、世界遺産地域をふやす計画がすすみ始めている。小笠原、南西諸島は次の登録候補地となった。

島を世界遺産にする……というとき、どんなことに注意する必要があるのか？登録から10年の屋久島をルポする。

■世界遺産が屋久島の自然を守ったのか？

屋久島といえば「世界遺産」、大自然の島、自然環境が守られている島、という印象を持つ人が多いだろう。

「そういうイメージは、1993年の世界遺産の登録で突然できたものではなく、昭和40年代（1965年ごろ）からの『屋久島の森を守る会』の活動や、最近では鹿児島県の『環境文化村構想』まで、一貫してこの島が環境に対して意識を持ってきたからでしょう」（屋久杉自然館・日下田紀三さん）。

しかし、その高い意識は、この島で長年にわたって行なわれてきた巨木伐採の現実と表裏一体である。その中でかろうじて残された森が国立公園であり、森林生態系保護地域となり、世界遺産となる。

島の産業はこの間、どう変化したのか。縮小傾向にあるのは林業である。昭和40年代まで島の経済の中心であった林業も、現在は「切れるところで採算が合う場所は皆切り終えた」といわれ今はかつて伐採されたまま山中に放置されたり、土埋木となった屋久杉を搬出する作業が中心となっている。

「このままでは山で巨木を切る技術も、途絶えてしまう。山は200年、300年後も考えて森をつくり、管理することも必要」（愛林代表・高田久夫さん）と、林業関係者は次の世代の担い手不足を心配する。

遺産登録は島の陸地の一部分だけで、海の自然には触れていない。かつては島で稼ぎが最もいい仕事は漁師といわれたが、乱獲や川の水質の変化で沿岸での漁獲高は減少し、種子島方面で漁をしたり、磯釣りの観光客を乗せて生計をたてる漁師が多くなっているという。

農業の環境にも、遺産登録はあまり関係していない。特産のかんきつ類、タンカン、宮崎産のものとの市場流通のコスト勝負で苦戦を強いられている。第一次産業にかかわる島民にとって、世界遺産の登録は他人ごとといった印象が強い。

しかし、遺産地域の一部である海岸沿いの西部林道を、バスも通れるように拡幅しようという計画が持ち上がったとき、「利便性より自然環境を優先しよう」という声が高まり、鹿児島県は計画を凍結した。「遺産のために、多少の不便はやむを得ない」という気持ちを、今は多くの島民が共有している。

■保全された自然の活用に活路を開く

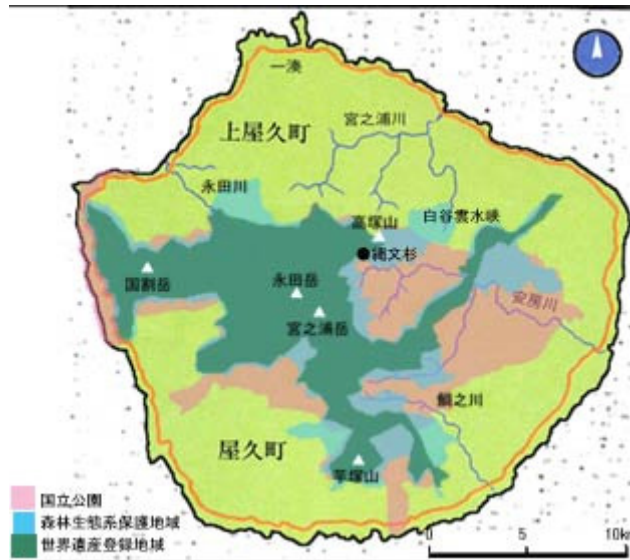
屋久島で10年前と大きく変わった点は、来島者の増加と、広い意味での観光業の振興だ。

厳密にいうと、これも遺産登録での急増ではないようで、1989年（遺産登録の4年前）の高速艇就航で客足が伸び、この年、前年の6万9千人から一気に12万人台を突破した。その後遺産登録による知名度のアップが加わり、2002年には28万人もの来島者を記録した。団体ツアーも増え、民宿や素泊まりの宿泊施設も急増している。

年間4万人の観光客が目ざすのが縄文杉だ。昨夏ピーク時には1日389人もが縄文杉へ向かった。環境省、鹿児島県や上屋久町、屋久町では観光客の「入り込み数」を調査し、荒廃する登山道とトイレの整備・管理に、追われ続けている。

遺産に登録されたからには、長期的な保全計画や、自然のモニタリング調査などの体制が取られているはず、と思う人もいるかもしれないが、ようやく保全エリアや宿泊施設のピーク時の観光客数が把握されつつある段階で、地域への適正な客数がどのくらいなのかという検討や、植生や生態系の長期的な調査や保全策検討にまで予算がまわっていない。

屋久島の自然保護関連指定地域



縄文杉に人が集中するのは遺産登録以前からだが、観光客が増加するにつれ、縄文杉へ向かう人の数も増えた。弱ってきた縄文杉を保護するため、1996年には展望デッキがつけられ、じかに縄文杉に触れることはできなくなった。

「観光客の声を聞くと、縄文杉しか知らなかっただけで、必ずしも縄文杉を見たいのではなく、島独特の自然を知りたいという人も多い」（屋久島野外活動総合センター＝YNAC・松本毅さん）。



縄文杉への一極集中を懸念したネイチャーガイドらは、縄文杉以外の場所を案内しながら自然解説を行ない始めた。その結果、「自然を見直す目を持った」とリピーターとなった人も多いという。

増え続ける需要で、必然的にガイドの数は激増し、職業として島に定着させた。現在、観光客の3割は、ガイドを利用しているという。「島で手っ取り早く稼ぐなら、昔・漁師、今・ガイド」などと島の人が語るように、10年前は10人ほどだったのが、今は80人から100人以上といわれている。

「観光協会に所属していないガイドもいて、実数は把握できない。自然解説の内容が悪いと、クレームがくることもある。観光協会では昨年、ガイド部会を発足させ、今後、ライセンス制も視野に入れ、質の向上や料金の統一について討議している」（屋久島観光協会・小脇清治さん）。

環境省、両町はガイドたちに、登山道の修復事業の委託も始めた。周辺の倒木や石を使い、登山者が歩きやすいよう整備がこまめに行なわれている。

■すべてお金が必要な社会への変化

観光業、ガイド業の成長の一方、失われつつあるものもある。

「昔は、家の棟上げは、集落内の助け合いで行なっていた。今はすべて業者に頼む。お金を介在させずに、人と人がかかわってきた自然経済のなごりも薄れつつある」（季刊「生命の島」編集発行人・日吉眞夫さん）。

また、地元の学生が高校卒業でほとんど島外に出るので、人口は減少傾向だが、雄大な自然に憧れ、退職後などに都会から移住する人は、後を絶たない。町が若い世代の人口の減少に歯止めをかけようと、移住目的の人に町の土地を売却し、新しい集落をつくったり、農村留学で全国からの希望生徒と母親を、積極的に受け入れたりもしている。廃校を免れるなどの効果は大きいですが、島外からの移住者の文化は、大型スーパーや車社会への転換に拍車をかけた。集落ごとにあった個人商店や古い慣習も、消えつつあるという。

■「これから、どこに向かうか」の分岐点

遺産登録で最も変わったことは別にある。子どもたちが、故郷に誇りを持てるようになったことだ。

「かつては島の子とばかりにされ、島出身と言えなかつ

た時代もあった。でも今の子どもたちは、どこに行っても『世界遺産の屋久島から来ました』と胸を張って言える」（小脇さん）。

エコツーリズムという言葉も、島内に浸透した。しかし、団体ツアーの観光客を増やしたい、屋久島をブームとしてだけで終わらせたくないという焦りが、「世界遺産」の価値を、「NHKドラマのロケ地めぐり」などと並列で語られるものにしてしまっている。

屋久島の本来の姿をありのままに見せ、無農薬でつくられた島産の食材が宿で出されたり、おみやげが用意される・・・というように、農林漁業者や観光業が連携し、島全体で「さすが世界遺産の島」といわれるような社会をつくらなくてはと、多くの人が口にする。そのために、自然という財産を、安易に使ってはいけない、とも。



▲YNACのフォレストウォークエコツアー

「北太平洋最大のアカウミガメ産卵地、永田の浜では、昨年、過去最高の産卵頭数となった。しかし、これを“道具”にしてはいけない。自然を守ることが、世界遺産の本来の意味なのだから」（NPO 屋久島うみがめ館・大牟田一美さん）。

世界遺産は、観光の看板のために登録するものではない。何が遺産として価値を認められ、それを守るために何が必要なのか、屋久島はこの10年、試行錯誤を続けている。

今年から、屋久島、白神山地に続く第3の登録地づくりが開始されたが、次もまた屋久島と同じことを繰り返すのでは、との懸念をぬぐいきれない。登録することで、どのような自然と人のかかわりを持つ場にしようとするのか、その意図を明確にしておく必要を、痛切に感じた。

（まとめ・編集部）

[日本自然保護協会 HOME](#) | [NACS-Jの活動記録](#) | [屋久島自然林の保全 index](#)

このサイト内の無断転載はかたくお断りします。

Copyright (C) 2007 THE NATURE CONSERVATION SOCIETY OF JAPAN, All rights reserved.